

鈍色ニビイロのヘルメット 二十歳の闘争

黒柳安弘

【登場人物】

小松原ミチコ

澤田カツトシ

高柳マナブ

吉野ミノル

加藤ヒトミ

早川トモコ

野川サナエ

藤堂シンジ

鴨池コウタロウ

全共闘メンバーたち

【プロローグ】

1965年 夏

休日の上野公園あたり。映画館帰りの高校生と思しき制服姿の少女たちが歩いている。  
小松原ミチコ（16）が、はしゃいだ様子で早川トモコ（16）に話しかける。

ミチコ「映画良かったね！」

トモコ「……。」

ミチコ「トモコ？」

トモコ「はあー（ため息）。」

ミチコ「どうしたの？」

トモコ「ほんと、感動したー！！ 人生で初めてだよ、こんなに心が震えたの！」

ミチコ「笑顔」。

トモコ「トラップ大佐もマリアも、子どもたちもみんな素敵。私も一緒に歌いたくなっちゃった。」

ミチコ「うん。」

トモコ「ね？ミチコはどのシーンが好き？やっぱり大佐のエーデルワイス？（歌い出す）

エーデルワイス、エーデルワイス、ラーラララーラ……。」

トモコ、大佐の真似をしてギターを持つ仕草、ミチコにも歌うように促す。

トモコ・ミチコ「ラーララ、ラーララ、ラーラララ、ラーラー。」

ミチコ「笑って）もちろんエーデルワイスも素敵だったけど、私はリーズルとロルフのことも気になっちゃったな。」

トモコ「そうだね。あんなに幸せそうなカップルだったのよね。」

トモコとミチコ、一緒に *Sixteen Going On Seventeen*（劇中歌）を歌い始める。

トモコ・ミチコ「You are sixteen going on seventeen ララーララー、ラーララー、

ラーララー、ラーララーラ……（分からないところはハミングでごまかす）。」

トモコ「そっかあ。リーズルって私たちと同じ年なんだね。」

ミチコ「うん。」

トモコ「ねえ、最後ロルフはなんでリーズルと逃げなかったのかな？せっかく大佐も一緒に  
行こうって誘ってくれたのに。」

ミチコ「それは、ロルフにもきっと家族がいるし、あそこでリーズルと一緒にには行けなかつた  
んだと思うよ。」

トモコ「そっか。オーストリアから逃げ出したって分かったら、残された家族がひどい目に  
合わされるかも知れないものね……。」

ミチコ「うん。戦争って残酷だよね。」

トモコ「うん。(話題がころっと変わり) そういえば来週、二者面談があるじゃない？

進路とか話すのよね。ミチコはもちろん大学進学希望でしょ？」

ミチコ「うん、そのつもりだけど。」

トモコ「受ける学校決めたの？」

ミチコ「お父さんが、女は就職して良い相手を見つけて、いずれ家庭に入るのが一番良いんだから、その為にも女子大に行けて。」

トモコ「そっか。ミチコは女子大に行くのかあ。羨ましいな。」

ミチコ「そんなことないよ。トモコはどうするの？」

トモコ「まだ決めてないけど、親は卒業したら店を手伝って言うてる…。」

ミチコ「トモコはどうしたいの？」

トモコ「私は歌手になりたいな。倍賞千恵子さん、憧れるなあ。」

ミチコ「歌うの好きだもんね。でもトモコのお父さんの作るラーメンとっても美味しいってみんな言ってるよ。私も大好き。」

トモコ「ありがとう。」

広場のほうが騒がしい。

ミチコ「何かしら？」

「ベトナム戦争反対！」「ベトナム戦争協力拒否！」「アメリカは出ていけ！」などの

シュプレヒコールが響く。

トモコ「最近多いよね、ああいうの。」

ミチコ「反戦デモみたいね。」

ミチコは抵抗を感じながらも、少し興味がある様子。

トモコ「(ミチコを促して) ねえ、もう帰ろうよ。」

ミチコ「ちょっと行ってみようよ。」

トモコ「危ないよ。先生からデモには近づくなって言われてるじゃない。」

ミチコ「ちょっと見るだけだよ。」

やがて警官隊とデモ隊の学生たちとの衝突が始まる。

飛んで来た石が頭に当たり負傷するミチコ。

ミチコ「あっ！」

トモコ「ミチコ…どうしたの！」

ミチコ気を失う。

あわてて抱きかかえるトモコ。

トモコ「ミチコ、ミチコ！」

ミチコ「……。」

トモコ「誰か、誰か助けて下さいー！」

そこへ男（澤田カツトシ）登場。

男 「大丈夫か？」

トモコ「友達が、飛んできた石が頭にあたって、怪我しちゃったんです。」

男 「見せてみる。」

男、ミチコを抱きかかえ、症状を調べている。

バッグから水筒を取り出し、タオルを濡らして患部に当てる。

男 「大丈夫か。しっかりしろ。」

ミチコ、しばらくして意識を取り戻す。

ミチコ「あ……。」

ミチコ、男を見つめる。

ミチコ「……。」

男 「…気が付いたか。」

トモコ「ミチコ、良かった。」

男 「脳震盪を起こしたんだ。しばらくは安静にしていたほうが良い。」

男に変わり、トモコがミチコを抱きかかえる。

トモコ「ありがとうございます。」

ミチコ「……。」

男 「いって事よ。これに懲りたら、デモには近づかない事だ。」

トモコ「はい。」

男、去っていく。

ミチコ「あっ、あ……。」

トモコ「行っちゃったね。」

ミチコ「……うん。」

ミチコ、落とし物（アジビラ）に気付き、手に取る。

そこには「東大ベトナム反戦会議」と書いてある。

ミチコ「東大ベトナム反戦会議……。顔を上げて）東大……。」

暗転

【1】

インターナショナルの合唱が聞こえてくる。

（作曲：ピエール・ドジェーテル、作詞：佐々木孝丸・佐野碩）

やがて、演壇に男（澤田カツトシ）が現れる。

演壇の後ろには「東大全共闘」の旗が掲げられている。

男

「全学友諸君、有志諸君！我々は諸君らの心に、志に問い掛けている。我々は幾度も東京大学に要求を突きつけて来た。だがしかし、我々の要求を未だ大学当局は受け取ろうとしない！日大の大衆団交は行政の長による不当な介入により覆された！

このような暴挙を許す事が出来るだろうか。否、出来ない！断固として許されない！我々は満腔の怒りを持って闘いの継続をここに宣言する！学問の自由が保障されない国でいかなる進歩が起るだろうか。賢明な諸君は気付いている筈だ。常に人類は科学・研究の成果を分配する事で発展してきたのだ。戦争に勝った国は何処か、学問が進んだ国だ！歴史が証明しているのだ！然るに愚かなる権威主義者どもは、自らの既得権を守る事にひたすらしがみつき、自らの権限を奪おうとする者達をひたすら排除してきた。国家として民族としての進歩など学問の自由無くして望みようが無い！

学友諸君！有志諸君！今こそ我々の、この旗の元に集って頂きたい。我々こそがこの国の未来を真に憂いているのだ。我々の戦いが無為なる徒労に終わるなら、この国に学問の未来は無くなる。今こそ我々の義拳に力を貸して頂きたい。そして我々は、今ここに東大闘争全学共闘会議を結成する。志あるものは我々の義拳に呼応して頂きたい。闘おう、我々の未来の為に、この国の学問の府を守るために！

東大闘争全学共闘会議議長 澤田カツトシ」

1968年7月 東大全共闘結成前

「パシヤツ」「パシヤツ」シャッターを切る音

舞台が明るくなる。

舞台上には、澤田（26）、加藤ヒトミ（22）、高柳マナブ（24）、吉野ミノル（22）、全共闘メンバーたちがいる。高柳は少し離れたところでタテカン作業をしている。

澤田 「(ヒトミに) おい、こんなんではほんとに良いのか？ちよっとおおげさじゃないか。」

ヒトミ 「いいの、いいの、これぐらい派手なほうが読者に受けるんだって。」

吉野 「やらせは良くないと思うけどなあ。」

高柳 「権力と闘うためにはまず国民を味方につけるのが一番なんだ。俺たちのやっている事は正しい事なんだと。」

ヒトミ、なおも澤田をモデルに写真を撮っている。

吉野 「(ヒトミを見て) そもそも、こちらはどなたです？」

澤田 「(演壇から下りて) ああ、言ってなかったか？俺の知り合いで、ジャーナリストの

加藤ヒトミ君だ。」

ヒトミ 「どうも。」

澤田 「あちこちの学園闘争を取材してその内容を知り合いの出版社に提供しているんだ。

こっちとしても、メディアに勝手な想像で書きたてられるより、実際の声を届けてもらえるからありがたい。『政治ジャーナル』って知ってるか？これまでもインタビュー記事載せてもらってる。」

吉野 「加藤…ヒトミ…さん？…ふーん…ほうほう。いやー…うーん。」

吉野、ヒトミを品定めするような目つきでジロジロ眺めている。

ヒトミ 「…なんだよジロジロ見て、気持ち悪いなあ。何か言いたい事でもあるのか。」

吉野 「無し。」

ヒトミ 「無しって、おい、どういう意味だ、このチビ！」

吉野 「いやいや、チビって…。あなたねえ、人を見た目で評価するのは人として最低だぞ！」

ヒトミ 「それはこっちのセリフだ！」

ヒトミ、吉野に詰め寄ろうするが、澤田が制する。

澤田 「まあまあ、それぐらいにしとけ。」

ヒトミ 「気を取り直して。(澤田に) 明日の夜、本部を封鎖するって聞きましたけど。」

澤田 「ああ、明日の夜に実行する。」

ヒトミ 「本部の封鎖という事はつまり、安田講堂を封鎖すると。」

澤田 「まあ、そういう事だけど、俺たちの真の目的は封鎖したうえでの解放なんだ。」

ヒトミ 「解放…。」

澤田 「そう。安田講堂は東大生でもめったに足を踏み入れることの出来ない、神聖な場所とされている。だが、大学の施設が学生に解放されていないなんておかしいと思わないか？本来、大学の自治権は俺たち学生にあるべきなんだ。だから、俺たちの管理のもと、

安田講堂を東大生、ひいては外部の学生にも開放するつもりだ。権力の及ばない講堂で、学生たちが自由な議論を繰り広げる。そういう場所が必要なんだ。」

ヒトミ「なるほど。」

高柳 「もちろん抗議の意味もある。俺たちは3日前、総長会見が中断したあと座り込みをしていたが、総長のみならず職員の一々として戻ってくる気配がなかった。学生を馬鹿にしている！」

吉野 「総長が心電図つけて出てきたときには思わず笑いそうになったもんな。

体からコードがぶら下がっていて。いかにも僕ちゃんは重症ですって雰囲気でき。そんなに重症ならさっさと総長の座を別の奴に明け渡せっていう話だよな。」

高柳 「(ヒトミに) そういえば君は、あちこちの学園闘争を取材しているみたいだけど、ここ以外の大学も取材したりするのかい？」

ヒトミ 「もちろん色々な大学の活動を取材しているよ。日大、早稲田、慶応、明治、駒沢、東京女子、御茶ノ水…。」

吉野 「(食い気味に) 女子大!？」

ヒトミ 「日大全共闘にも女子のセクトがあるし、炊事班がいて炊き出しなんかも女子がやってくれるんだよ。」

吉野 「はあ、恵まれてるなあ、日大生。どうりで強いわけだよ。やる気にもなるよな。うちの場合、女子が少ないから仕方ないけど、でも東大全共闘にも少しくらい女の子が欲しいよなあ。」

この辺りまでにミチコ入ってきているが誰も気付かない。

ヒトミ「(ニコッと可愛らしい感じで) 女の子ならここにいてもいいよ?」

吉野 「えっ、××××(自主規制音で聞き取れない)。」

ヒトミ「何だと!××××(自主規制音で聞き取れない)！」

ミチコ「あのお…。」

吉野 「はあ?、××××(自主規制音で聞き取れない)！」

ヒトミ「上等だあ!」

ヒトミ、吉野に4の字固め。

吉野 「(苦しそうに) だから、そういうとこ!」

澤田 「(高柳に) 変わろうか。」

高柳 「あと少しなんだけど…。」

澤田 「どれどれ。」

高柳が変わって澤田がタテカン作業を始める。高柳は作業を横で見ている。

ミチコ「あのお…。」

ヒトミ「どうだああああ!」

吉野叫び声を上げる。

高柳 「おい、吉野うるさいぞ！」

ミチコ 「(大きな声で)私を東大全共闘に入れて下さーい！！！」

みんなようやくミチコに気付いて注目する。

ミチコ 「(動揺気味に)あ、あの、こちら東大闘争全学共闘会議の本部と伺って来たのですが…。」

高柳 「…女だ。」

吉野 「か、可愛い、(ヒトミを払いのけ、わざとらしく紳士的に)いかにもここが東大全共闘の本部ですが、どのようなご用件ですか？」

ヒトミ 「はあ…。(疲れて、ぐったりしている)。」

ミチコ 「私、小松原ミチコと言います。東大全共闘に入りたいんです。」

吉野 「吉野ミノルって言います。ミチコちゃん歓迎します！」

高柳 「おい！(吉野に小声で)お前、ほんとに節操がないな。東大全共闘はまだ結成前だぞ。メンバーは慎重に選ぶ必要がある。」

吉野 「別にいいじゃないですか。東大全共闘は、誰にでも開かれた組織にするんですよ？それに守るべき女の子がいた方が、男も強くなるってもよ。ね、澤田さん  
良いですよね。」

澤田 「東大全共闘として活動したいならそれは君の自由意志だ。同志は歓迎するよ。だが、ここは見ての通り男ばかりだ。君は女なのに、どうして東大全共闘に参加しようと思っただんだ？」

少しの間

ミチコ 「…私、大学のインターン制度反対の頃からずっと皆さんの活動を見ていました。ただど見ていただけで何かしようなんて思っていませんでした。ビラを見て、そんなことがあったんだなって、それだけでした。でも最近の大学のやり方は明らかにおかしいです。何かあれば退学処分、集会があれば機動隊を大学に入れて、逮捕者まで出してる…。」

ヒトミ、起き上がって写真を撮り始める(ミチコに関心を持った様子)。

澤田 「うん。」

ミチコ 「でも、私も大学のやり方はおかしいって思っているから大人しく授業を受けているということは、結局は大学のやり方に賛同していることに他ならない。だから、私も行動を起こしてみようって…。そう思ってここに来ました。」

澤田 「…なるほど。俺たちの活動が理解され始めていることが分かって嬉しいよ。  
改めて、俺は澤田、よろしく。」

ミチコ「よろしくお願いします。」

澤田「で、あいつが高柳。愛想は悪いが、根は良いやつだ。」

ミチコ「(高柳に) よろしくお願いします。」

高柳「……(やや不満げな表情)。」

吉野「ところでミチコちゃんは年はいくつ？」

ミチコ「19歳、もうすぐ二十歳です。文学部の二年生です。」

吉野「ということは、ストレートで合格したんだ。優秀なんだね。」

ミチコ「いえ、そんな。」

澤田「(ミチコに) さっそく、俺たちが使っている部屋を案内しよう。それじゃあ、(吉野と高柳を見て) 高柳、この子に俺たちが使っている部屋を案内してやってくれるか。」

高柳「何でオレなんですか!」

吉野「ちよつと澤田さん。俺が案内しますよ。行こ、ミチコちゃん。」

ヒトミ「私も行く。」

吉野「えー。」

ヒトミ「何だよ?」

吉野「いや、別に……。」

ヒトミ「私は加藤ヒトミ、よろしくね。」

ミチコ「よろしくお願いします。」

吉野「行ってきまーす(少し残念そう)。」

吉野、ヒトミ、ミチコ部屋を出ていく。澤田、再びタテカン作業を続ける。

高柳「本当に彼女を参加させるんですか。」

澤田「なんだ、お前は反対なのか?」

高柳「これは、遊びじゃない。権力との闘いです。女性がいると足でまといになりかねないし、邪な考えを起こすやつが出てくるかもしれない。すでに吉野は浮足立っていますし。そういうのが増えると全体の士気にも影響します。」

澤田「お前は相変わらずだな。戦後の混乱の中でここまで日本が復活を遂げたのは、男の力だけによるものじゃない。女性だって闘って来たからこそ今日の日本があるんだ。先日の日大闘争では、機動隊からも犠牲者が出て、世間からの風当たりも強くなってきている。その中で自ら仲間に入りたくないと志願してくれたのはありがたいことだと俺は思う。いずれ俺たちの闘いでも、敵味方問わず大きな犠牲が出るかもしれない。けが人の手当てだけでもしてもらえれば大きな助けになるわけだし。」

高柳「澤田さんは優しすぎます。」

澤田「よし、こんなもんで良いだろう。(タテカンを持つとうとして) 手伝ってくれ。」

澤田と高柳、タテカンを持って去る。ミチコが再び現れ、スポットライトが当たる。

ミチコ「こうして私は再び澤田さんに出会いました。あの時、高校生の時に出会った憧れの人。私が東大に行こうと決めたきっかけとなった人。もちろん、大学のやり方がおかしいと感じ、行動を起こさなければいけないと思い、そのために全共闘に入ることを決めました。でもこの場所を選んだのはやっぱり澤田さんの影響なんだろうな。親の言いなりだった私が初めて自分の意志で東大に行きたいと伝えたら、「東大なんて女子が行く場所ではない。」と言って反対されたけど、猛勉強して無事合格できて。私がここにいるのは、きっと澤田さんのおかげ。だから何か澤田さんの役に立ちたい。こうして私の東大闘争が始まったのです。」

暗転

## 【2】

平手打ちの音（パーン）が響く。

明転

1968年9月 安田講堂前の広場（テント村）

安田講堂でもまもなく演説集会が行われようとしている。

舞台上には野川サナエ（26）と吉野。吉野はヘルメットをかぶっている。

サナエ「あなたはとても破廉恥な方ですね。」

吉野 「ハ…ハレンチ…？」

サナエ「厚顔無恥。恥知らずも良いところだわ。」

吉野 「俺はただ、あなたを助けてあげよう…。」

サナエ「それこそがケダモノの考え方そのものではないですか。女性は弱いものと決めつけている自分勝手なケダモノですわ。」

吉野 「おれはただ、道案内をしよう…」

サナエ「あなたは私の前に立ちました。破廉恥な行為だと気づきませんか？」

吉野 「ハレンチ…。」

サナエ「女性の前に平気で立つ。これは無意識の内に女性を軽んじている行動の現れです。

私を助けようと思うなら、まずは横に立ち、（掌で指し示すしぐさ）こうして示すべきでしょう？それをあなたは、あろうことに私の手に突然触れてきて、恥を知りなさい。」

吉野 「誤解だよ、誤解。荷物を持ってあげようとしただけだって。」

サナエ「はあー（ため息）。座りなさい。」

吉野 「え？」

勢いに押されて吉野、路上に正座する。

サナエ「あなたは男女平等、男女同権について考えたことはありませんか？」

吉野 「もちろん。常々女の子には優しくしようと思ってますよ。」

サナエ 「なぜですか？」

吉野 「それは、やっぱり女の子は男と比べて力が弱いし……」

サナエ 「そこです。女性は男性と比べ力が弱い。それは無意識のうちに男女を比べ女性を見下している発言だと思わないのですか？」

吉野 「……(考える)なるほど。」

サナエ 「優しくしようと思うのはあなたの勝手な考えであって、女性はあなたに優しくされようなんて考えていないとは思わないのですか？」

吉野 「なるほど。つまり一方的な優しさは、相手に取っては迷惑に他ならないと……。」

サナエ 「その通り。あなたも少し分かって来たようですね。」

吉野 「でも、だからといって叩かなくても良いんじゃないですか……？」

そこへヒトミがやってくる。

ヒトミ 「(吉野に)何してんの？」

吉野 「何してんのかって、見て分からない？この人に怒られてるの！」

ヒトミ 「どうせやらしい事でもしようとしてたんじゃないの。」

吉野 「してないって!!」

サナエ 「(ヒトミに)あなたも全共闘？」

ヒトミ 「いいえ。(サナエに気づき)女性活動家の野川サナエさんですよ。」

サナエ 「私のことをご存知なのね。」

ヒトミ 「そりゃあ、かの福田英子の再来と呼ばれている有名人ですから。」

サナエ 「あなたは、この小さい全共闘さんより話が分かりそうね。」

吉野 「(ボソッと)小さいは余計だよ。」

ヒトミ 「今日はこれから演説されるんですよ。私が会場までご案内します。終わった後、よかったら取材させて下さい。」

サナエ 「じゃあ、お願いするわ。(吉野に)あなたももう許してあげてよ。」

(ヒトミに)行きましょう。」

ヒトミ 「荷物お持ちしましょうか？」

サナエ 「あら、気が利くわね。ありがとう。」

サナエ、ヒトミ安田講堂に向かって去っていく。

吉野、複雑な表情で2人を見送る。

反対から澤田、高柳、ミチコがやってくる。

澤田 「吉野、何で道端で正座してるんだ？」

吉野 「ちょ、ちょっと聞いて下さいよ。女の人にね、道案内しようとして荷物重そうだったから、親切心で持ってあげましょうかって言ったたら、ビンタされて、」

気がついたら正座させられてました。」

ミチコ「？」

高柳 「どうせお前のことだ。やらしい事でもしようとしたんだろう。」

吉野 「してませんって！」

澤田 「(吉野に) ところで、特に変わった様子はないか。」

吉野 「そうですね。今のところ」あけぼの隊」にも特に目立った動きはないです。」

澤田 「何かあればすぐに知らせてくれ。」

吉野 「はい。」

高柳 「(澤田に) 我々も急ぎましょう。」

澤田、高柳、ミチコが安田講堂に向かっていこうとすると、

“あけぼの隊”の藤堂シンジと鴨池コウタロウがやってくる。

藤堂と鴨池は赤いヘルメットをかぶっている。

藤堂 「(澤田に) 女子なんか連れて歩いて良いご身分だな。」

澤田 「(ミチコに) 下がるよう目配せ) ……。」

藤堂 「軟派なこった、これが東大全共闘議長様とは聞いて呆れる。なあ、コウタロウ、そう思うだろう？」

鴨池 「そうだ。僕だって彼女が欲しい。」

藤堂 「(澤田に) そもそもお前は真剣さが足りないんだ。俺の演説の時、いつも退屈そうにしてたよな。」

澤田 「良く見てるなあ。君こそ演説に集中したらどうだ。」

藤堂 「何だと。」

澤田、藤堂睨み合う。

澤田 「話はちゃんと聞いているよ。君の主張は、話し合いより暴力だろ？そのための仲間も集めているみたいだし、何やら物騒なものも準備していると噂になってる。」

藤堂 「言葉で通じない以上は力尽くで闘うしかないだろう。俺たちが掲げているのは東大解体だ。こんなろくでもない大学は潰れて然るべきなんだ。」

鴨池 「そうだ。暴力反対。」

澤田 「意見の相違だな。俺たち東大全共闘が望んでいるのは、あくまで話し合いでの解決だ。バリケード封鎖はしているが、いつでも話し合う準備はある。」

藤堂 「(澤田に詰め寄り) お前たちはこの腐った大学の教授どもとマトモに話し合いが出来ると思っっているのか？」

澤田 「…熱いなあ、藤堂。その熱さ、羨ましいよ。だが、頭はクールな方が良い。頭に血が昇ったままじゃ、ロクな話はできないぜ。」

藤堂 「うるさい！お前が天下を取ったつもりでいい気になっていられるのも今だけだ。」

澤田、藤堂の睨み合いが続く。鴨池は何故か吉野を睨んでいる。

藤堂 「行くぞ、コウタロウ。」

鴨池 「……。」

藤堂、鴨池去っていく。

高柳 「引き上げていくところを見ると、今日はやつら襲って来ないみたいですね。」

吉野 「あー、怖かった(ホッとした様子)。」

澤田 「(ミチコに) みつともないところを見せてしまったな。」

ミチコ 「いいえ。」

高柳 「澤田さん、そろそろ集会の時間です。行きましょう。」

澤田 「吉野も、もう少ししたら見張りを解いて良いぞ。」

澤田、高柳、ミチコ去っていく。

三人が去った方とは逆からトモコがやって来て、キョロキョロ辺りを見回している。

吉野、トモコに気付いて

吉野 「君、どうかした？見かけない顔だけど。」

トモコ 「あの、ミチコを探してるんです。知りませんか？」

吉野 「ミチコ？」

トモコ 「小松原ミチコ。ここ数日家にも帰っていないっていうから、何かあったんじゃないか  
と調べて心配で探しに来たんです。」

吉野 「(笑顔) ああ、ミチコちゃんなら俺たちと一緒にいるよ。」

トモコ、ヘルメット姿の吉野をじっと見つめて。吉野に平手打ち

トモコ 「あんたがミチコを誘拐したのね。この人さらい！ミチコを返せ！」

吉野 「ちよっと待って、何でそうなるんだよ。」

トモコ 「ミチコを返して。返してってばー(泣く)。」

吉野 「お、落ち着いて。ミチコちゃんは自分の意志でそうしてるんだよ。」

トモコ 「(泣きながら) ミチコは真面目なのよ。そんな訳ないでしょ！新聞やTVで言ってるわ。  
学生が建物を占拠して、大学に反抗してるって。」

吉野 「そ、それは……。」

トモコ 「(泣きながら) 武器を作ったり、建物壊したり、好き勝手してるんですよ？そんな、  
ところに、閉じ込められて……ミチコ……、怖い思い、してる……はずだから、だから……私が

……(以下、何を言っているか分からない)。」

吉野 「……困ったなあ。と、とにかくミチコちゃんのとこに案内するから、話はそれから……、  
ね？」

トモコ「…(泣き止んで)分かりました。でも、もしミチコに何かあったら、タダでは済ませませんよ。」

吉野「だから何もしてないって。」

トモコ「さっさと案内しなさい。」

吉野「はい。」

吉野、トモコ去っていく。

### 【3】

安田講堂内 大講堂

演壇に野川サナエが現れる。

サナエ「皆さん、私たちの根源にあるものは何でしょうか、それは怒りです。女性は人類史に於いて長きに渡り虐げられてきました。しかし、私たちは文化文明を手に入れた。人類が何千年何万年と繰り返して来た狩猟・農耕の時代は終わったのです。多くの人々は第一次産業から解放され、身体的特徴による性別の役割分担は意味を喪ったのです。女性は男性に劣ってなどいいのです。同じ腹から産まれ、つがいの子を為し、そして死んでいく。一体何処に差があると言おうのでしょうか。」

女は若いうちに男に見初められて嫁に行く事が幸せであり、大学校など行ってなまじ知恵を付けるのは不器量な女のやる事だ。かつて目白にある日本女子大は”目白の姥捨て山”と呼ばれていました。

女は産まれた時には親に従い、嫁いでは夫に従い、老いては子に従えと。このような父権主義者達の戯言を、女性蔑視の絶えない世の中を叩き壊さねば。

さらに彼らは賢しうで優しい相貌をしてこう言うのです。

『そんなに傷付いて可哀想。守ってあげる』と。こんなものは優しさではない。

女性の尊厳を踏みにじっているのです。守られる道理など無い。ただ、責任を背負った一個の人格として認めよと言っているのです。

西洋の紳士がそらぞらしく行うレディーファーストも、女性の尊厳を無視した、父権主義であると断言します。

皆さん、男女同権をどうか誤解しないで下さい。浅はかな考えに囚われないで下さい。新しい時代には、新しい思想・価値観が必要なのです。」

サナエの演説が続く中、次第に舞台が明るくなっていく。

演説を終え、演壇を降りるサナエ。ヒトミと吉野がやってくる。

ヒトミ「サナエさんお疲れ様でした。(吉野に)おしぼり！」

吉野 「はい。」

吉野いそいでおしほりを渡す。  
額を拭うサナエ

サナエ 「喉が渴いた…。」

ヒトミ 「(吉野に) 水！」

吉野 「はい。」

吉野いそいで水を渡す。  
水を飲むサナエ

ヒトミ 「(サナエに) さきほどの演説素晴らしかったです。感動しました！」

サナエ 「そうかしら (まんざらでもない)。」

ヒトミ 「この後、部屋で詳しくお話をうかがわせて下さい。(吉野に) 荷物よ、急いで！」

吉野 「はい。」

あわてて吉野出ていく。

サナエ 「どこか涼しいところが良いのだけれど。ここは暑くてたまらないわ。」

ヒトミ 「涼しい場所へご案内します。」

サナエ 「ルームエアコンがあるところが良いわね。」

などと言いながら、ヒトミ、サナエ講堂を出ていく。

吉野、荷物を持って戻ってくる。

吉野 「あれっ?」

ヒトミの声 「急いで！」

吉野 「はいはい。」

ヒトミの声 「はいは1回!!」

吉野の声 「はい!!」

吉野、去る。

変わって東大全共闘の部屋 本部

ミチコ、トモコが座っている。

トモコ 「ミチコ、お母さんを安心させるためにも、とにかく一旦家に帰ろう…。」  
ミチコ 「嫌よ。帰ったら、授業が再開するまでお父さんが家から出してくれないわ。」

トモコ「だからって、それじゃ…お母さんが可哀想だよ。」

ミチコ「…お母さんには…時々電話してるから。ねっ、トモコが、私が元気にしてましたって伝えてくれれば、お母さんもきっと安心すると思うの。」

トモコ「ミチコ…。」

ミチコ「…ごめん。」

トモコ「(ミチコをじつと見つめて)しばらく見ないうちに痩せたね。」

ミチコ「(やや動揺)…そうかな。」

トモコ「私には分からない。ねえ、ミチコは何と闘ってるの？大学？」

ミチコ「うん。新聞では学生が校舎を占拠して暴れてるとか、機動隊が鎮圧したとか、

大学当局が解決策を模索しているとかそういう報道ばかりでしょ？でも、

事実とは全く違う。私たちは大学側と対等に話し合いがしたかったの。それを拒否して

いるのは大学側。私は自由意志で闘うことを決めたの。トモコ、分かってくれないかな？」

#### 少しの間

トモコ「…わからない。」

ミチコ「えっ。」

トモコ「やっぱり私には分からない。分からないけど…。きっと正義感の強いミチコの事だからどうしても許せない、よほどの事なんだろうね。」

ミチコ「トモコ。」

トモコ「お母さんには、私から、ミチコは大丈夫だって伝えておくよ。」

ミチコ「ありがとう。」

トモコ「その代わり、私も時々ここに来ていい？」

ミチコ「え？」

トモコ「私も真実が知りたい。そしてミチコのお父さんお母さんにも真実を伝えるの。」

そうすれば、きっとわかってもらえると思う。」

ミチコ「ありがとう、トモコ。」

トモコ「私はずっとつきりミチコが悪い人たちに捕まって、閉じ込められてるんだと思ってた。」

ミチコ「えっ、そうなの？(笑)」

トモコ「ほんとに心配してたんだから、もー許さない！今度美味しいものご馳走しろ。」

ミチコ「トモコ、いっぱい食べるから大変だなあ。」

ミチコ、トモコ笑い合っている。

そこへ澤田が入ってくる。

澤田 「楽しそうだな。話は済んだのかい？」

ミチコ「あ、はい。二人きりにさせてくれてありがとうございました。」

トモコ「あ、あの。私も時々ここに来てても良いですか？この闘争のこともっと知りたいんです。」

澤田 「構わないが、ご両親が心配するんじゃないか？」

トモコ「説得します。」

澤田「…分かった。」

トモコ「ありがとうございます！」

ミチコ「じゃあ私、トモコを送ってきます。」

澤田「うん。」

トモコ（澤田に）失礼します。」

ミチコ、トモコ部屋を出る。入れ違いに高柳がやってくる。

高柳、二人を訝しげに見送って

高柳「澤田さん、今の子は？」

澤田「ああ、ミチコ君の友達で、彼女を連れ戻しに来たそうだ。」

高柳「どうなったんです？」

澤田「これからも時々ミチコ君に会いに来て、鬭争のことも知りたいらしい。」

高柳「許可したんですか？」

澤田「別に断る理由もないだろ。」

高柳「澤田さんは甘すぎます。」

澤田「……。」

高柳「ただでさえ、彼女の事で、あけぼのの奴らに東大全共闘は女を連れて歩いていると馬鹿にされている。俺たちは命を賭して闘っているのに、そんな事で馬鹿にされるのはやりきれない。」

澤田「分からなくはないがな。（机に積んであるビラを手に取り）ところで、これ書いたのだれだ？」

ビラを高柳に手渡す。

高柳「（ビラを見て）これは吉野だと思いましたが、酷いな。」

澤田「…うーん。」

そこへ吉野が疲れた表情で入ってくる。

吉野「ただいま戻りました。」

高柳「何だ吉野、ずいぶん疲れているみたいだな。」

吉野ぐったりと床に這いつくばっている。

澤田「ヒトミ君の取材の手伝いに吉野を行かせたんだ。」

高柳「ほう。」

澤田「さっき演説していた、野川女史のインタビューだそうだ。」

高柳 「あの野川サナエ。女性と同伴で女性にインタビューなんて、吉野にとっては天国みたいなものだな。」

吉野 「あれは地獄です！」

高柳 「お前には良い薬になったみたいだな。」

澤田 「そう言えば、ヒトミ君が明日東京女子に取材に行きたいんだが、また手伝いを頼みたいと言ってる…。」

吉野 「(ガバっと起き上がり) ぜひ行かせて下さい！」

澤田たちのいる部屋が暗転

ミチコとトモコが再び入ってくる。

トモコ「ねえ、さっきの澤田さんって人、いつだったか公園でミチコが怪我したとき、

手当してくれた人だよな？」

ミチコ「…うん。」

トモコ「やっぱり。女子大に行くって言うていたミチコが、東大に行きたいって言い出した時には正直驚いたけど。あの人を追いかけてきたのかあ。良いなあ。青春だねえ。」

ミチコ「違うよ。私は澤田さんの情熱、考えに共感して付いていきたいって思っているだけで…。」

トモコ「はいはい。私には分かっているから大丈夫だよ、私も恋したいなあ。」

ミチコ「恋って？ちよつと、トモコ本当にそんなんじゃないってば。」

トモコ「いいの、いいの。」

ミチコ「もう…。」

トモコ、ミチコ去っていく。

東大キャンパス内 正門あたり

入れ替わりでサナエがやって来る。地図とコンパスを頼りに出口を探している。

サナエ「ええと、北がこっち？南はこっちだから…。」

地図とコンパスを見ながらウロウロしている。

サナエ「ここはどこなのよ！ 東大って広すぎるのよね。次の予定もあるのに…。」

ヒトミが荷物を持って追いかけて来る。

ヒトミ「サナエさん。(息を切らして) これ、忘れ物です。」

サナエ「あら、わざわざありがとう。ねえ、ついでに出口まで送ってくれないかしら？」

ヒトミ「えっ、はい。と言ってもすぐそこなんですからね。ご自宅に帰られるのですか？」  
サナエ「これから津田塾で講演があるの。」  
ヒトミ「お忙しいですね。」

サナエ「でも今日は2校だけよ。多い時は7校は回るわね。」  
ヒトミ「ひえー。駅までお送りしますね。」

サナエ「ありがとうございます。助かるわ。」

ヒトミ、サナエ去る。

#### 【4】

1968年10月 再び東大全共闘 本部

舞台には澤田、高柳、ミチコ。

ミチコは少し離れたところでガリ版作業をしている。

澤田 「法学部の学生集会が、ようやく終わったらしい。」

高柳 「徹夜してたんですよ。どうだったんですか。」

澤田 「うん、無期限スト決行が決まった。」

高柳 「法闘委のやつらも頑張ったな。東大の全学部が無期限ストに突入となれば、いよいよ大学側と学生側の全面戦争になる。大きく局面が動きそうですね。」

澤田 「そうだな。足並みが揃ったところで大衆団交を要求して、あとは大学当局がどうするか。」

高柳 「やつらこれまで、大衆団交にも総長の辞任要求にも応じてこない。総長に至っては、病気を理由にずっと雲隠れしたままだ。」

澤田 「しかし、全学部が一斉ストライキとなれば、大学側だってさすがに譲歩せざるを得ないだろう。」

高柳 「ところで、昨日は、駒場のほうがだいぶ騒がしかったみたいですが。」  
ミチコ「……。」

澤田 「ああ、夜中に”あけぼの隊”の襲撃があったらしい。バリケードがかなり破壊されたみたいだ。俺はこれから吉野を連れて駒場の様子を見に行ってくる。」

澤田、ミチコの所へ近づき

澤田 「どうだい？塩梅は。」

ミチコ 「(出来上がったビラを見せて) どうでしょうか？」

澤田 「……うん、良い出来じゃないか。」

ミチコ 「ありがとうございます。」

澤田 「ミチコ君は字が上手いから助かるよ。」

ミチコ「ありがとうございます。でも澤田さんの書く文章には敵いません。」

澤田「まあ、一日の長さ。そうだ。今度はミチコ君が、ビラを書いてみないか？」

ミチコ「私が文章を書くのですか？」

澤田「ああ。いつも清書ばかりお願いしていたからな。よろしく頼むよ。」

ミチコ「はい、頑張ります。」

澤田「(ヘルメットを手に取り) 今日はこちらから吉野を連れて、駒場の応援に行ってくる。」

高柳が残るから、何かあったらあいつに相談してくれ。」

ミチコ「分かりました。」

高柳「……。」

そこへトモコが入ってくる。

トモコ「おはようございます。」

澤田「トモコ君、おはよう。そうか、今日は日曜日か。」

トモコ「はい。今日はお店はお休みです。」

澤田「ここに籠もって過ごしていると曜日の感覚もなくなってくるな。じゃ、行ってくるよ。」

(高柳に) あとは頼む。」

澤田出ていく。

高柳は、静かに本を読み始める。

トモコ「ねえ、ミチコ何刷ってるの？」

ミチコ「街頭で撒くためのビラよ。』(以下、ビラの内容) 東京都民の皆様へ無期限ストライキで闘う東大生は訴える。東大は官僚養成工場であり、東大生は社会的悲惨と苛烈な収奪の養護者であった。だが今は違う。我々はそのような恥ずべき将来を断固拒否し、乗り越えようとしているのである。これに対し、大学当局は沈黙を守り、機動隊という暴力装置を導入することによって弾圧をかけてきた。我々はこれに屈することなく、強固なスクラムを敷いて戦い抜く覚悟である。全都民の皆さんのご理解と暖かいご支援を願う次第である。東大闘争全学共闘会議』  
これで少しでも私たちの活動を理解してもらって、活動に必要な費用をカンパしてもらおう。」

トモコ「へえ、ミチコも、すっかり全共闘闘士になったねえ。そう言えば、日大にも全共闘ってあるじゃない？」

ミチコ「うん。」

トモコ「日大の人たちはなんで全共闘を作ったの？」

ミチコ「日大全共闘の場合は使途不明金問題からね。国税局の発表で、20億円の使途不明金(裏金)が見つかったって報道があったのは知ってるでしょ？」

トモコ「20億円も。大学の収入ってつまり授業料でしょ？たしかに親や自分が働いたお金が

横領されていたなんて知ったら、私だったら怒り狂うな。」

ミチコ「トモコはすぐカツとなるからね(笑)。」

高柳「君たち、少し静かにしてくれないか。」

トモコ・ミチコ「あつ、すいません。」

高柳「ここは、遊びに来るところじゃない。仲良しごっこがしたいんだったら、さっさと作業を終わらせて他所でやってくれ。」

トモコ「仲良しごっこ…必要な事以外は話すなって事ですか？」

高柳「そうは言わないが、だいたい女性の話は長くて、ほうっておくといつまでも終わらない。」

トモコ「それは偏見だと思います。」

ミチコ「ちよつと、トモコ。」

高柳「そうかな？君も東大共闘や日大共闘のことを知りたいのなら、小松原君に聞くより、まずは自分で調べたらどうだ。それを怠って、彼女の作業の邪魔を  
しているは、遊びに来ていると思われても仕方がない。」

トモコ「…(言い返せない)。」

高柳「澤田さんは甘いから言わんだろうが、俺はこの闘いに女は参加するべきではないと  
考えている。」

ミチコ「何故ですか？澤田さんは自由意志だと言ってくれました。」

高柳「自由意志…ね。だがそのせいで、犠牲になっている人がいることに気付かないのか。」

ミチコ「…。」

高柳「君たちがここにいることで、澤田さんや俺たちがどういう目で見られていると思う？  
女とイチャイチャしているお遊び連中だ。それに、女は男と違って力がない。

勿論そのこと自体を悪いと言っているわけじゃない。身体作りが違うわけだし、  
社会で求められる役割が違うのだから。やはり闘いには、女性は足手まといになる  
から参加するべきではない。」

トモコ「ちよつと、それは一方的過ぎませんか？女は弱いつて決めつけてるけど、ミチコは  
本当は…。」

ミチコ「(トモコを遮って) いいのよ、トモコ。私がいることで皆さんが冷やかな眼差しを  
向けられているのは事実ですし、申し訳ないと思っています。でも、私は自由意志で  
ここにいてることを選択しました。もし迷惑をかけているなら、少しでも挽回できる  
ように頑張ります。」

高柳「それが迷惑だと言っているんだ！」

ミチコ「…失礼します。」

ミチコ、部屋を出ていく。

トモコ「ミチコ！（高柳に）ミチコは一所懸命皆さんの役に立とうって頑張ってます。

それなのにあんまりです。」

トモコ、ミチコを追って出ていく。  
一人残される高柳。

高柳 「……。」

突然、予期せぬ場所からサナエが現れる。驚く高柳。

サナエ 「話は聞かせてもらったわ。上から目線で偉そうに、父権主義の権化みたいな男ね、あなたは。」

高柳 「野川サナエ、なんでそんなところにいるんだ？」

サナエ 「そんなことはどうでも良いでしょう。安田講堂は解放された自由な空間なのでしょう、私がどこにしようと自由なはずよ。」

高柳 「そういう問題じゃないだろ。」

サナエ 「今日は、こちらの議長さんに話があつて来たのだけれど。」

高柳 「澤田さんなら出ている。今日は戻らないんじゃないかな。」

サナエ 「そう、また出直すわ。」

高柳 「澤田さんに何の用だ。」

サナエ 「…あの記者の子。彼女からお話を聞いて、ぜひ会ってみたいと思っただけけれど、残念ね。」

サナエ、ミチコが刷っていたビラを手に取り眺めながら

サナエ 「女性が活躍する世の中がきつとやって来る。力なんて関係ない。能力のある女性が

男性を越えていく時代よ。私が何故このような活動をしているか分かるかしら？」

高柳 「おおかた、男に酷い目にあわされたんじゃないのか。その腹いせだろう。」

サナエ 「…私も以前はあなたがたのように、学園闘争に参加していました。でもそこで

思い知ったのは、闘うべきは国家権力やアメリカだけじゃない、女性を奴隷のように

扱うこの社会そのもの。男尊女卑の解消無くして真の平等、社会構造の変革は

ありません。海外ではウーマン・リブ（女性解放）運動が活発化して、女性の社会進出

も増えているわ。いずれ日本でも同じ事が起きる。それも近いうちにね。」

高柳 「何が言いたいんだ。」

サナエ 「このままだとあなた、時代に取り残されるわよ。東大を全世界と思ひ込んだ常識

なんて捨てておしまいなさい。旧い体制を変えるための全共闘運動なのでしょう？」

高柳 「……。」

サナエ 「つい、ムキになってしまったわ。また来ますね。」

サナエ、元の場所へ戻っていく。

高柳しばらく考え込んで、部屋を出ていく。

安田講堂の外（広場） 同時刻

ミチコ登場、続いてトモコが追いかけてくる。

トモコ「待って。」

ミチコ「…ごめんね。」

トモコ「やだなあ、何でミチコが謝るのよ。」

ミチコ「だって、トモコを巻き込んだのは私だもの。」

トモコ「ちがう。私は自分の意志でここに来てるの。ミチコが気にすることじゃないよ。」

ミチコ「うん。」

そこへ藤堂、鴨池やってくる。

藤堂はゲバ棒を携えている。

藤堂 「(ミチコに) お前、確か澤田が連れて歩いてる女だな。何だ全共闘を

追い出されたのか？」

トモコ「ミチコ、こいつら誰？」

ミチコ「あけぼの隊」。私たち全共闘と対立している人たちよ。」

藤堂 「俺たちの部隊に入りな。歓迎するぜ。」

高柳やってくる。

高柳 「藤堂に、鴨池…？」

藤堂 「(高柳に気づいて) なんだ、お迎えが来たみたいだな。なあ高柳、この女、うちで

もらっても良いよな？」

トモコ「ちよっと、なに勝手なことやってんのよ！この眉毛！」

藤堂 「(高柳に) どうなんだ？」

高柳 「…。」

藤堂 「お前の事だ、闘いに女は邪魔だと思っているんだろう。」

高柳 「…。」

藤堂 「(ミチコ、トモコに) お前らは全共闘では邪魔だそうだ。だったら俺たちのところに  
来な。役に立てるぞ。」

鴨池 「一緒にトランプしよう！」

トモコ 「誰があなたたちと一緒になんか行くもんですか！」

藤堂 「そいつを捕まえろ。」

鴨池、トモコを拘束する。

鴨池 「おどなしくしてて。」

ミチコ「トモコ！」

トモコ「いやっ、離して！」

トモコ、鴨池の足を思い切り踏みつける。

トモコ「離せ！」

ミチコ「離しなさい！」

ミチコ、助けに行こうとするが、藤堂にゲバ棒で制される。

藤堂 「大人しくしていれば乱暴はしない。(ミチコに) お前も一緒に連れて行ってやる。

こいつらには必要ないみたいだからな、高柳。」

高柳 「……。」

鴨池 「痛っ(足にダメージ)！」

藤堂 「さ、お前も来るんだ。」

藤堂、ミチコを拘束しようとする。

藤堂 「言っておくが抵抗しない方が身のためだぞ。」

ミチコ「さっきからあなたはさっしやいぶん身勝手ね。」

藤堂 「うん？」

ミチコ、身構える。

藤堂 「何だ、痛い目に合いたいようだな。」

高柳 「止せ、藤堂！」

ミチコ、藤堂を格闘の末に組み伏せる。

隙を突いて、高柳が鴨池からトモコを引き離す。

ミチコ「(藤堂を見下ろして) いい？あんなの所になんて絶対行かないわ。私は自由意思で

全共闘にいるの。ここには崇高な志を持った闘士が沢山いるわ。あなたのように

ひねくれた考え方をする人の所になって、行ってたまるもんですか。」

藤堂 「このアマ。」

ミチコ「まだやるの？」

藤堂 「覚えておけよ。行くぞ、コウタロウ。」

鴨池 「えっ、どうするの？女の子は。」

藤堂、去っていく。

鴨池 「待ってよ、シンジ。じゃあまたね！」

鴨池、逃げるように去る。

高柳 「(ミチコに) …すまなかった。」

ミチコ 「いいえ。トモコを助けてくれてありがとうございます。」

高柳 「君は、強かったんだな。」

トモコ 「お父さんが空手の師範で、ミチコも小さい頃から鍛えられてたんです。」

ミチコ 「…。」

高柳 「俺は、君から総括されねばならんな。」

ミチコ 「でも、高柳さんはトモコを助けてくれました。」

高柳 「闘ったのは君だ。」

ミチコ 「高柳さんは最後には闘ってくれます。澤田さんと同じ、崇高な魂を持った人ですから。」

高柳 「君には負けたよ。今までのことは謝る。俺は心のどこかで、どうしても女性がここに  
いることが許せなくて。仲良しごっこをしていたのはむしろ俺の方だったのかも  
しれない。澤田さんや吉野と一緒に闘っている自分に酔っていた。」

高柳、ミチコに手を差し出して

高柳 「あらためて、これからもよろしく、ミチコ君。」

ミチコ 「こちらこそ、よろしくお願いします。」

ミチコ、高柳、握手。

暗転

## 【5】

スポットライトが付くとヒトミが立っている。

ヒトミ 「1968年4月、国税局が発表した、20億円にのぼる使途不明金問題が発覚し

始まった日大闘争は、日大全共闘側の大衆団交と理事の辞任要求に対し、大学当局は、  
暴力団や体育会の学生を使った襲撃や、機動隊を導入する強硬手段を取った。

その事で更に学生側の抵抗は激しさを増し、学園紛争で初めて機動隊による催涙ガス弾  
が使用され、対する日大全共闘側も火炎瓶で応戦するなど双方とも多くの負傷者を  
出した。そのような日大全共闘の過激化に対し、世間の批判も強まり、当初は学生を  
擁護していた報道も徐々に否定的に変わって行った。窮地に立たされた日大全共闘は、  
東大との共闘を目指し、1968年11月22日、安田講堂前において、

日大・東大闘争勝利全国学生総決起大会に3000名もの日大全共闘学生が参戦。

これを機に、日大全共闘と東大全共闘の協力体制が作られて行く。」

ヒトミのスポットライトが消え、明転。

1968年11月 安田講堂内のどこか

火炎瓶作りをしている澤田。少し離れたところで、吉野も火炎瓶を作っている。

そこへミチコが入ってくる。

ミチコ「何を作ってるんですか？」

澤田「火炎瓶って知ってるかい？」

ミチコ「はい、日大の学生たちが機動隊に向かって投げているのをニュースで見たことがあります。」

澤田「俺たちも日大に倣って作ってみようと思ってな。」

ミチコ「でも、危険なものなんじゃ？」

澤田「そうだな。使い方によっては相手を死に至らしめる可能性もある。」

ミチコ「そんな危険なものを使うんですか！」

澤田「日大闘争では機動隊は催涙ガス弾を導入して来ている。攻撃を防ぐためには、使う使わないに限らず、俺たちもより強力な武器の使い方覚えておく必要があると思わないか。」

ミチコ「(少し考えて)分かりました。私にも教えてもらえますか？」

澤田「そうだな。まず、瓶の中にガソリンと灯油を半分づつ入れる。それから、アルコールを染み込ませた布でしっかり密閉をする。」

ミチコ「こうですか？」

澤田「そうだ。なかなか器用だな。」

ミチコ「ありがとうございます。」

澤田、ミチコの作った火炎瓶を確認し、ケースにしまう。

別の瓶を取り出し

澤田「今度は最初からやってみるか。」

ミチコ「はい。」

ミチコ、火炎瓶を作り始める。

その間、吉野は一人黙々と作業している。

澤田「(吉野に) 珍しく真面目にやってるじゃないか。どれどれ。」

吉野「あっ(瓶が倒れる)。」

澤田「褒めた途端これだ。力づくで押し込もうとするからだ。」

吉野「でも、蓋が取れないようにしないとイケない訳だから、ギチギチに詰めないと。」

ミチコ「先に端から入れていって、最終的に蓋が閉まれば良いんですね？」

澤田「その通りだ。」

吉野「ミチコちゃんすごいな。なるほど。こんな感じですか？」

吉野、やっぱり上手く出来ない。

澤田 「うーむ…。」

ミチコ 「ええ…(苦笑)。」

そこへ高柳がやってくる。

高柳 「澤田さん、作業中すみません。外で日大の生徒がバリケードの補強方法について

レクチャーしてくれるそうなんです、ぜひ澤田さんにも来てほしいと。

時間は掛からないそうなので、お願いできますか？」

澤田 「わかった。…(吉野とミチコを見て)ミチコ君、ここを任せても良いか？」

ミチコ 「はい。もちろんです！」

吉野 「…俺もバリケードの方が良いかな。ミチコちゃんお願いして良い？」

ミチコ 「いいですよ。ここは私に任せてください！」

吉野 「ごめんね、ミチコちゃん。ありがとう。」

澤田、高柳、吉野出ていく。

ミチコ 「重大任務任されちゃったぞ。まずは…(辺りを見渡して)ちよっと整理しようかな。」

ミチコ、澤田や吉野が作業していた辺りを片付け始める。

ミチコ 「久しぶりかも、一人の時間…静か…。」

ミチコ、鼻歌を歌いながら、作業を始める。

ヒトミが入ってくる。が、ミチコは気付いていない。

ミチコ 「えっと、まず、瓶の中にガソリンと灯油を半分づつ入れて。それから、アルコールを  
染み込ませた布でしっかり密閉…。」

ヒトミ 「わっ！」

ミチコ 「きゃっ！」

ヒトミ 「えへへ。」

ミチコ 「ヒトミさん。危ないじゃないですか。」

ヒトミ 「何やってるの？」

ミチコ 「火炎瓶作ってるんです。」

ヒトミ 「火炎瓶！割れると爆発するやつだよ。危なあ。」

ミチコ 「(笑って)大丈夫ですよ。火がついてませんから、爆発はしません。」

ヒトミ 「びっくりしたなあ、もう。」

ミチコ 「何か御用ですか？」

ヒトミ「ここに澤田さんがいるって聞いたから。」

ミチコ「つい今さっきまでいたんですけど、日大の皆さんに呼ばれて高柳さんと吉野さんと表の方へ。それほど時間は掛からないとの事でしたが。」

ヒトミ「行き違いかぁ。戻って来るってことだね。それなら、ここで待ってようかな。」

ミチコ「ぜひ。一人きりになってしまったので。」

ヒトミ「そうかぁ、東大全共闘もついに火炎瓶か。」

ミチコ、再び作業を続ける。ヒトミはミチコを写真に撮りながら

ヒトミ「ところでミチコちゃんってさぁ、澤田さんのこと好きだよね。」

ミチコ「えっ、何ですか、いきなり…。」

ヒトミ「いやぁ、澤田さんという時のミチコちゃんの目が、何となく気になってさぁ。」

ミチコ「…き、気のせいです。」

ヒトミ「たぶんみんなには気付かれてないよ。私の場合は職業病。」

ミチコ「…怖いなぁ、ヒトミさんは。」

ヒトミ「いつから?」

ミチコ「…初めて会った時からです、たぶん。(動揺気味に)絶対澤田さんには内緒にしてくださいね!」

ヒトミ「うん。」

ミチコ「実は、高校生の時に澤田さんに会っていて。澤田さんは覚えていないっていうか、気にも留めていない出来事なんだろうけど。」

ヒトミ「それで。」

ミチコ「映画を観た帰りに、デモに巻き込まれて怪我をしたんです、私。」

その時に傷の手当てをしてくれたのが澤田さん。」

ヒトミ「映画みたい。そこで恋が芽生えて…?」

ミチコ「その時はそこまでは…。でも、残されたビラに「東大」って書いてあって。」

ヒトミ「追いかけてきた…と。」

ミチコ「それだけじゃないですよ。ここにいる一番の目的は、大学のやり方に対する怒りなので。」

鴨池、いつの間に入ってきて、何やら不審な行動をとっている。

ヒトミ「うんうん。」

ミチコ「もうやだなぁ、ヒトミさん。ヒトミさんこそどうなんですか?」

ヒトミ「何が?」

ミチコ「恋愛…とか。」

ヒトミ「あるように見える?」

ミチコ「…え、ええっと。」

ヒトミ「私はね、まだ恋とか分からないんだ。ミチコちゃんより年上なのに

おかしいかな？」

ミチコ「いいえ、そんな事ないです。」

ヒトミ「今、私の心を熱くするものと言えば、この子（カメラ）。この子を通してみると、普段見えないものが見えてきたりするんだ、不思議だよね。」

ミチコ「私のことも？」

ヒトミ「そう！ファインダー越しに見ているとね、あ、なんだか普段と違うなとか、この人はこんな風に考えているんだらうなって、なんとなく分かるの。」

ミチコ「良いパートナーですね。」

ヒトミ「うん。だから、私は男性のパートナーはしばらくいらなかな。あつ、でもこの子以上の男性が現れたら、大恋愛しちゃうかも。」

ミチコ「いやー、それはさすがに…。」

ヒトミ「何だよ。」

ミチコ「えへへへ。」

ヒトミ「ごまかすな。」

ミチコ、ヒトミ笑い合う。

鴨池、吉野が作った火炎瓶を手にとって

鴨池「ダメだなこれ。」

ヒトミ「（鴨池に気付き）誰だお前！」

ミチコ「あつ、あの時の変な人。」

鴨池、なおも他の瓶を手にとって見ている。

ミチコ「危険なので触らないでください。」

鴨池「これ、ダメだよ。これも、これもダメ。」

鴨池、瓶をより分ける。

ミチコ「何をしてるんですか？」

鴨池「クイズ。小さい瓶と大きい瓶、割れやすいのはどっち？」

ミチコ「何の話をしてるんですか？」

鴨池「決まっているでしょ、火炎瓶を使う時の話だよ。」

ミチコ「それは、大きくて軽い方が…。」

鴨池「正解。（小瓶を手に取り）じゃあ、これは割れると思う？」

ミチコ「…割れないんですか？」

鴨池「うん。これを割ろうと思ったら、この安田講堂の屋上なんかじゃ足りないよ。液体もたいして入らないから、落下速度も上がらないし。」

ヒトミ「じゃあ、大きい方が良いつてこと？」

鴨池「大きすぎてもダメ。考えてもみなよ、一升瓶いっぱいに水分を入れたとして、

遠くまで投げられる自信ある？」

ミチコ「それは…。」

鴨池 「ダメだなあ、君たちは。東大生なんだから頭良いんじゃないの？まあ、いくらお勉強が出来ても実戦じゃ役に立たないけどね。」

ヒトミ「君はいったい誰だ？」

鴨池 「…え？（ヒトミをじっと見つめて）君、名前は？」

ヒトミ「へ？加藤ヒトミ。」

鴨池 「君も全共闘？」

ヒトミ「私は全共闘じゃないわ。」

鴨池 「そうだよ。君みたいな可愛い子もいるんだったら、思わず全共闘に入ろうかと思っちゃったよ。」

高柳、吉野が戻ってくる。

吉野 「あっ、お前、なんでここにいるんだ？」

鴨池 「邪魔者が来ちゃったな。用事は済んだから帰るよ。盗聴器の調子が悪かったんで直しに来たんだ。」

高柳 「盗聴器だと？」

鴨池 「あ、失言。今の言葉は”取り消し”ね。ヒトミちゃんまたね。」

鴨池、逃げるように去っていく。

吉野 「なんだ、あれ。」

高柳 「盗聴器を仕掛けられていたとは。」

ヒトミ「気に入られてしまった…。」

吉野 「あいつ、変わった趣味だな。」

ヒトミ「…あ？」

吉野 「あ…。今の言葉は”取り消し”で…。」

ヒトミ「取り消せるかあ！」

ミチコ、ヒトミ、高柳、吉野のいる部屋が暗転

同時刻 大学構内 あけぼの隊のアジト  
明転

藤堂がスリングショット（パチンコ）を作っている。そこへ鴨池が戻ってくる。

鴨池 「ただいま。」

藤堂 「どうだった？」

鴨池 「盗聴器、やっぱり断線しかかった。あと、やつら火炎瓶作っていたよ。」

でもみんな下手でき。レクチャーしてきてやったよ。」

藤堂 「余計なことはしなくていい。」

鴨池 「そう言えば、シンジがやられた女の子と、もう一人可愛い女の子が一緒にいたよ。」

藤堂 「それよりあの女、俺に恥をかかせやがって。今に見てろよ。」

鴨池 「ずいぶん彼女にこだわるね。もしかして、あの子に惚れちゃった？」

藤堂、鴨池を一瞥

藤堂 「うるさい。(スリングショットを掲げ)出来たぞ。」

鴨池 「それ、シンジが作ったの？」

藤堂 「ああ、火炎瓶や投石ではどうしたって飛距離が稼げない。機動隊の催涙弾に対抗するために、少しでも遠くに飛ばせる強力な武器が必要だ。こいつを使えば、上空のヘリだって攻撃出来る。対機動隊の武器の選択肢は一つでも多いほうが良い。」

藤堂、スリングショットを構えてゴム紐を引く。

暗転

## 【6】

1968年12月 安田講堂 時計塔（見晴台）

時計塔の見晴台に澤田が立っている。そこへミチコがやってくる。

ミチコ 「澤田さん。」

澤田 「？(ミチコに気付く)」

ミチコ 「高柳さんから、澤田さんならたぶん見晴台にいるだろうって何って。」

澤田 「ああ、ちよっと一服しようと思っただけ。どうした？」

ミチコ 「ビラの文章を書いてみたので、澤田さんに見て頂きたくて。」

澤田 「そうか。ぜひ読ませてもらうよ。」

ミチコ 「お願いします。」

ミチコ、ビラを澤田に手渡す。澤田、ビラを読み始める。

澤田 「(以下、ビラの文章) 全学友諸君、有志諸君に告ぐ。東京大学の民主化をめざす闘いは、いまや重大な局面を迎えている。これまでも、我々東大生は様々な困難を乗り越えてきた。先ごろも、バリケード封鎖反対を叫ぶ武装した過激派集団に対し、

我々東大生は果敢に闘い、安田講堂を守り抜いた。このような暴力に私たちは決して屈することなく、『学生による自治』と『真の解放』を勝ち取るために連帯して闘おう。

東大民主化闘争の勝利のために！ 1968年12月15日 東大闘争全学共闘会議。」

澤田、ビラを読み終えて

澤田 「うん、良いんじゃないか。」

ミチコ 「ありがとうございます。」

澤田 「ミチコ君はすごいな。この頃は君の活躍を知って、全共闘の活動に参加したいという女子生徒も増えてきた。それに女性が参加することをあれほど嫌っていた高柳でさえ、すっかり考えを改めて女性の能力を認めるようになった。」

ミチコ 「私もここに来て澤田さん達と過ごすようになって、色々考え方が変わってきました。これからは年齢や性別にとらわれず、個々の能力で役割分担するべきではないでしょうか。」

澤田 「ほう？」

ミチコ 「例えば食事の準備は主に女性が行っています。逆にタテカンやビラの作成は、私も清書はお手伝いすることがありますが、文章を作ったり、集会で演説するのは基本的に男性です。」

澤田 「まあ。そうだな。」

ミチコ 「以前、野川サナエさんの演説を聞いて、女性だって堂々と自分の意見を主張していいんだって思いました。炊事にしても料理が得意な男性もいるだろうし、材料は限られてるけど、みんなで手分けして作ればメニューも増えて食事がもっと楽しみになるんじゃないかなって。」

澤田 「確かに。自然とそういう役割分担になってしまっている事は確かだ。俺だって料理出来ない訳じゃあないしな。そうだ。今度の集会で今のお話をみんなの前でしてみたらどうだ？」

ミチコ 「私ですか？」

澤田 「高柳だって、吉野だって最初の演説はガチガチに緊張していたものだ。」

「何事も経験だよ。」

ミチコ 「…わかりました、やってみます。」

澤田 「うん。」

ミチコ 「あの、澤田さん…、もう一つお願いがあるのですが。」

澤田 「何だい。」

ミチコ 「私に剣道を教えて頂けませんか？」

澤田 「ああ、それは別に構わないが。そうだな。これからの闘いはより厳しいものになるから武器を使った戦い方も覚えておいたほうが良いかもしれないな。さっそく、今日からでも始めようか。」

ミチコ 「お願いします。」

澤田 「武道場が使えるか確認してくるから、また後で。」

ミチコ 「はい。」

澤田出ていく。

突然、サナエが予期せぬ場所から現れる。

サナエ「話は聞かせてもらったわ。」

ミチコ「あなたは、野川サナエさん？」

サナエ「あら、私のこと覚えてくれてたのね。小松原ミチコさん。ぜひ一度あなたに会ってみたいって思っていたの。うわさ通りの立派な闘士さんね。しっかりと自分の意見を持って主張する。とっても大切な事だわ。澤田君もあなたをととても信頼しているみたいね。」

ミチコ「澤田さんとお知り合いなんですか？」

サナエ「まあ、昔の話だけだね。ミチコさん、これからもあなたの活躍を楽しみにしているわね。」

サナエ、元の場所へ戻っていく。

ミチコ、しばらく考えて出ていく。

暗転

数日後の夜 安田講堂内のどこかの部屋

暗闇の中からギターの音が聞こえて来る。

舞台が明るくなると、高柳がイスに腰掛けてギターを弾いている。

そこへみかん箱を抱えたトモコがやってくる。

トモコ「あれっ、高柳さんお一人ですか？」

高柳「(戸惑い気味に) なんだ君か。」

トモコ「差し入れ持って来たんですけど、ミチコや澤田さんもいなくて。あちこち探したら

ギターの音が聞こえて来たので。」

高柳「ミチコ君ならきつと澤田さんと武道場にいると思うけど。」

トモコ「あっ、そう言えばミチコ、澤田さんに剣道教わってるんですけどね。高柳さんはここで何をしてるんですか？」

高柳「忘年会の時にギターで伴奏して欲しいと頼まれて。確かこの部屋にギターがあったと  
思ってた探してたんだ。多少痛んではいるが、手を入れたら何とか使えそうだ。」

トモコ「ここでも忘年会やるんですか？」

高柳「ああ、ほとんどの学生は、帰省してしまうが、残った奴らと外部の学生たちも呼んで  
ささやかにやるつもりだ。」

トモコ「へえー、楽しみだなあ。高柳さん、ギター弾けるんですね！」

高柳「少しだけど。ここに籠ってからはギターを弾く余裕もなかったけど。」

予想以上に長期戦になってしまったしな。」

トモコ「高柳さん、何か一曲弾いて下さい。」

高柳「急に言われても、何が良いかなあ。」

トモコ「エーデルワイス弾いてくれませんか？」

高柳「サウンドオブミュージックの？」

トモコ「私、この曲大好きなんです。」

高柳「うーん、コード進行くらいなら出来ると思うけど。歌で先行してくれる？」

トモコ「もちろん！行きますね。」

トモコ、「エーデルワイス」を歌う。途中からトモコに促され高柳も歌に加わる。

高柳「君は歌が上手いな。」

トモコ「いえ、好きだけです。特にサウンドオブミュージックが好きで。高柳さんは

映画観ました？」

高柳「ああ、観に行ったよ。…妹の付き添いで。」

トモコ「私もミチコと一緒に観に行つて。あつ、その時なんです、澤田さんに会つたの。

怪我をしたミチコを手当てしてくれて。すごく格好良かったんですよ、澤田さん。

ミチコは、その時澤田さんが落としたビラを見て東大に入ろうと決めたみたい。

ミチコの初恋だったのかも。」

高柳「そうだったのか。」

トモコ「あつ、ミチコには内緒にしてください。私が話したことが知れたら、

怒るかもしれないので。」

高柳「しかし、澤田さんはすでに…。」

トモコ「すでに…何ですか？」

高柳「いや、俺から話すことでもないだろう。」

そこへ、ミチコがやってくる。

ミチコ「トモコ、来てたの？」

トモコ「ミチコ。稽古はもう終わり？」

ミチコ「うん。澤田さんが根詰めて怪我でもしたらいけないから、今日はこの辺でやめて

おこうって。」

高柳「俺も後から行こうと思つていたんだが。」

ミチコ「いえ、私が澤田さんと二人きりで勝負したいってお願いしたんです。全く敵いませんでしたが。」

高柳「君の専門は空手だろう？それで澤田さんと剣道で勝負できるなんてたいしたものだよ。」

ミチコ「これからは武器を使った闘い方も必要になると思つて。」

高柳「（頷いて）年明けには再び機動隊の導入もあるんじゃないかともっぱらの噂だ。

闘いの手段は多い方がいい。」

トモコ「だから、火炎瓶を作っていたんですね。」

ミチコ「うん、澤田さんも使う、使わないに限らず、強力な武器の使い方を覚えておく必要があるって。」

高柳「それに、大学当局は年明けに学生側と大衆団交を行うことを決めたらしい。

どういうことか分かるかい？」

トモコ「話し合いを受け入れたという事ですか？」

高柳「そうじゃない。俺たち東大全共闘を排除して、大学側の方針に同調するノンポリのやつらと話し合って、強引に手打ちにしようとしているらしい。」

トモコ「でも、そんなこと何の解決にもならないじゃないですか。」

高柳「奴らは既成事実が欲しいだけさ。大学側と学生側で話し合って合意しましたと。

それを大々的に発表して、この問題は解決したと対外的に示そうとしているんだ。」

トモコ「そんな、滅茶苦茶じゃない。」

ミチコ「そうよ。そんな横暴許せない。だから、私も今までのように身を守るだけではなく、間違っていることは間違っていると、ちゃんと主張できるように自分自身を鍛えたいのよ。」

トモコ「私もね、最近考え方が少し変わって来たの。以前ミチコがここに立て籠もっているって聞いた時『分からない』って言ったけど、私も何度もここに来て話を聞いているうちに、だんだんミチコや澤田さんの考えに共感できるようになってきたの。

私もミチコに空手を習って、全共闘に入ろうかな。」

高柳「いや、それは…。」

トモコ「ダメですか？やっぱ私が女だから？」

高柳「この期に及んでそんなことを言うつもりはないよ。だが、共感できたから入ると言うのは間違いだ。気持ちが分かるのと、自分自身でそうしたいと思うのは別物だからな。よく考えてみた方がいい。」

トモコ「…やっぱり高柳さんで真面目なんですね。分かりました、よく考えます。」

せっかくミチコも来たことだし、もう一曲弾いてくれませんか？」

高柳「良いよ。何にする？」

トモコ「ミチコ、何が良い？」

ミチコ「(考えて) ええと、”花はどこへ行った”はどうですか？」

トモコ「うん。」

高柳「分かった。行くよ。」

高柳の伴奏で“花はどこへ行った”を歌い始める。

暗転

交響曲第9番 第4楽章『歓喜の歌』が聞こえてくる。

## 【7】

スポットライトが付くと吉野が立っている。

吉野「決戦を間近に控えた1968年、年の暮れ。東京近郊に自宅のある学生たちは次々と

帰省して行った。年明けすぐにも機動隊の導入があるのではという噂があったものの、

2、3日程度なら猶予はあるだろうという意見が大半だった。少しづつ人が減り、

安田講堂は妙に広く感じられた。大晦日の晩は外部の学生や活動家も呼んで

ささやかな忘年会が催された。高柳さんのギターで反戦歌を歌い、差し入れの僅かな酒を飲んで語らい、誰かが時計台から流した第九を聞いて過ごした。」

明転

1968年12月31日 安田講堂内 大講堂

大講堂で忘年会が催されている。

舞台上にはミチコ、サナエ、高柳、トモコ、吉野、全共闘メンバーたちが酒を酌み交わしている。

サナエ「ねえ、ミチコちゃんは、女性解放運動に興味はないの？」

ミチコ「興味がないわけではありませんが、活動家になるつもりはありません。」

サナエ「今でも十分に活動家じゃない。あなたは”東大のゲバルト・ローザ”って呼ばれているのよ。知らないの？」

ミチコ「私自身は言われたことがないので。そうですか、ゲバルト・ローザか…。」

サナエ「ご不満？」

ミチコ「どちらかと言うとナイチンゲールの方が好きです。」

サナエ「主導者よりも、後方支援の方が良いの？」

ミチコ「いえ、そう言う訳ではありませんが、まだまだ年少者ですし、何より女性なので。」

サナエ「あなたも、性別や立場に捉われているのね。」

ミチコ「え？」

サナエ「あなたほどの女性が、女であるからとか、年少だからという理由で退いて

しまっている。でもね、そんなの関係ないの。これからの時代はそんなしがらみは

無くして、より能力が高い人間が世の中を主導していくようになるの。実際、

欧米では女性の政治家もどんどん出て来ているし、いつかは女性の大統領が誕生する

時代が来るわ。」

ミチコ「女性の大統領…。」

サナエ「そう。今起こっている社会運動も、近いうちに終焉を迎えるでしょう。そうなれば、

次は私たち”ウーマン・リブ”の時代よ。その時が来たら、あなたにも力を貸して

欲しいの。」

ミチコ「私ですか…？」

サナエ「あなたの瞳、まだまだ無限の可能性を秘めている。でも、私が知る限り、全共闘では

あなたの能力を発揮出来るとは思えない。」

ミチコ「そんなことは…。」

サナエ「言い切れる？この東大という場所は、特に男性中心社会のように感じるわ。」

男女共学とは名ばかりで、女性は数パーセントしかないじゃない。大学の中でも、

特に男女格差が激しいところだわ。」

ミチコ「それについては否定出来ませんが…。」

サナエ「その中であって最前線で闘っているあなたに、私は可能性を感じているの。何より能力のある女性を埋もれさせたくない。あなたの瞳をもっと輝かせたいのよ。」

そこへ吉野がやってくる(だいぶ酔っている様子)。

吉野 「ミーチコちゃん、と：サナエさん!。」

サナエ 「あら、何か御用?」

吉野 「：い、いいえ。あの、お酒足りてます?ビール注ぎましょうか?」

サナエ 「ありがとう。でももう良いわ。少し酔ったから外に出て夜風に当たってくる。

ミチコさん、私もしばらくここにいることにしたわ。あなたの活動も見てみたいし。

(吉野に) 構わないわよね?」

吉野 「は：はい!」

サナエ 「許可も貰ったし。また後でね、ミチコさん。」

サナエ出ていく。

吉野 「ねえ、何を話してたの?」

ミチコ 「たいしたことじゃありません。気にしないでください。」

吉野 「そう?よし、それじゃあ一緒に飲もう。あっち、高柳とトモコちゃんが仲良すぎて

居づらいんだよね。俺も今ので一気に酔いが冷めちゃったよ。」

ミチコ 「ええ。ところで澤田さんは：?」

吉野 「ああ、なんか外で一服してくるってさっき出て行ったけど：。」

ミチコ 「：そうですか。じゃあ私も行ってきます。」

吉野 「えっ、ミチコちゃんも行っちゃうの?」

ミチコ、吉野に一礼して出ていく。

吉野 「結局一人かよ：。良いですよ。一人寂しくチビチビ飲みますよ。って、誰がチビだ!」

舞台が暗くなり、時計塔が明転

安田講堂 時計塔(見晴台)

澤田とサナエが立っている。

サナエ 「澤田君、お久しぶりね。」

澤田 「サナエ、今さら何の用だ?」

サナエ 「つれないわね、昔の恋人に向かって。」

澤田 「もう過去の話だ。」

サナエ 「しばらくここにお世話になることにしたわ。構わないでしょう?」

澤田 「別に構わんが、ここは危険だぞ。」

サナエ 「大丈夫よ。何かあったらあなたが助けてくれるのでしょ?」

澤田 「どういう了見だ?今さら学園闘争に戻りたい訳じゃないだろう?」

ミチコやつて来る。サナエの姿をみて、思わず物陰に隠れる。

サナエ「もちろん。強いて言うなら、そうね。あなたのところの小松原ミチコさん。

彼女に興味があるの。」

澤田「ミチコ君に？」

ミチコ「…。」

サナエ「世間では、この安田講堂が”全共闘運動最後の砦”と言われているみたいね。でもどう見たって勝ち目はない。貴方たち東大全共闘はここでお終いよ。

その前に彼女を同志として連れていきたいと思っっているの。」

澤田「それは彼女次第だろう？」

サナエ「そうね。でも、あなたがいる限り彼女はここに残るわ。もう気付いているのでしょうか？」

澤田「何のことだ？」

サナエ「彼女の願いはあなたと一緒に闘うこと。あなたの意思をあたかも自分の意思だと思えるくらい、あなたに心酔しているわ。」

澤田「…。」

サナエ「この先、ずっと彼女と一緒に活動していく気があるならそれも良い。でも、そうではないでしょうか？あなたには帰りを待っている人がいるのだから。」

澤田「…そうだな。」

サナエ「結婚したのよね。今さらだけれど、おめでとう。私はあなたのその優しさに苦しめられたけれど、奥様のことは大事にしてあげて頂戴。」

ミチコ「えっ…。」

澤田「言われなくても…と言いたいところだが、新婚早々家を空け続ける夫なんて褒められたもんじゃないな（苦笑）…。」

ミチコ、動揺のあまり転んでしまう。

ミチコ「あっ…。」

澤田「誰だ！…ミチコ君。」

ミチコ「ごめんなさい、私、盗み聞きするつもりじゃ…。あっ、あの…、失礼します！」

ミチコ立ち去る。

澤田「ミチコ君！」

サナエ「お止しなさい。あなたが行ったら彼女を余計苦しめるだけだわ。」

澤田「しかし…。」

サナエ「相変わらず、女心の分からない男ね。私が行くわ。」

澤田「…頼む。」

サナエ「確認しておくけど、彼女さえ良ければ、ここから連れ出しても良いのよね？」

澤田 「それが彼女の自由意志なら。」  
サナエ 「……。」

サナエ 去っていく。

澤田、ミチコの落し物（手紙）に気付いて手に取る。

澤田 「女心…か。」

暗転

安田講堂 時計塔（屋上）

ミチコが座って空を見上げている。

ミチコ “花はどこへ行った”をひとり口ずさむ。

曲の間奏が流れる中、暗転

## 【8】

スポットライトが付くと、ヒトミが立っている。

ヒトミ 「1969年1月10日、大学当局の呼びかけにより、秩父宮ラグビー場において七学部集会が開催された。この集会に反対する東大全共闘学生たちは、場外で機動隊と激しく衝突し、150名近い逮捕者を出した。

この出来事により、多くの同志を失った東大全共闘は急速に力を失った。

さらに東大全共闘に対し、1月17日までに安田講堂から退去しなかった場合、再び機動隊を導入するという最後通告を行った。

安田講堂攻防戦は1月18日と決まった。」

1月15日 東大全共闘 本部

暗闇の中で電話の呼び出し音が鳴っている。

ガチャ、受話器を取る音

澤田の声 「はい。東大闘争全学共闘会議。はい…私ですが…。」

舞台が次第に明るくなっていく。

舞台には、澤田、高柳、吉野、ミチコ、トモコ、サナエがいる。

澤田 「はい。…決定したということですか。…はい…みんなに伝えます。」  
ミチコ 「どうかしましたか。」

吉野 「澤田さん。」

澤田 「総長代行からの電話だ。17日までに全員ここから退去しなければ、機動隊を導入して強制的に排除するそうだ。明日にも機動隊がここを包囲する。」

高柳 「最後通告か。いよいよ機動隊との命懸けの闘いが始まる。」

ヒトミが新聞を手に飛び込んでくる。

ヒトミ 「澤田さん、澤田さんに逮捕状が出てますよ！」

澤田 「うん？」

澤田は新聞を受け取り、目を通す。

澤田 「これで俺も、ついにルンペン・インテリだな。」

ヒトミ 「何のんきな事言っているんですか。」

澤田 「これが、恐らく安田講堂での最後の闘いになる。俺はみんなにここに残れと強制はしない。安田講堂攻防戦は決して命のやり取りをする闘いではない。しかしはずみで命を失うこともあるだろう。逮捕、拘束され、懲役刑を受けるかもしれない。今ここを出て、このまま卒業していけば『東大卒』の肩書でそれなりの人生は送れるだろう。ミチコ君、君はここから出るんだ。」

ミチコ 「いえ、私は残って最後まで闘います。この闘いで女性が全員逃げてしまつては、結局女性は何もしなかったと思われてしまう。私が参加し最後まで闘うことで、女性も立派に闘ったんだと歴史に刻みたいのです。正直とても怖いですが、でも、私は全ての女性の尊厳の為に闘います。」

吉野 「ミチコちゃん。」

澤田 「…君というやつは。」

ミチコ 「澤田さんは、ここから出てください。」

澤田 「えっ？」

ミチコ 「私たちの闘いはこの安田講堂で終わってしまうかもしれませんが、でもみんなの闘いの火を、想いを絶やさないために、私たちのこれまでの闘いを無駄にしないために。」

澤田さんは外に出て、ここからの運動をリードして下さい。」

高柳 「澤田さん。ここは俺たちで守ります。後のことは頼みます。」

吉野 「…澤田さん！お、俺が澤田さんの分まで闘ってみせます！」

澤田 「……。」

ミチコ 「澤田さん。」

澤田 「……。」

サナエ 「あなたはここから出ていくべきよ。」

澤田 「…わかった。だが絶対死ぬなよ。お互い生きて、また会おう。」

ミチコ 「はい。澤田さんもお元気で。」

サナエ 「(ミチコに) 本当は力づくでも連れて行きたいけれど。これだけは忘れないで、これからの時代には、あなたの力が必要なのよ。」

ミチコ「…ありがとう、サナエさん。」

ヒトミ、泣きながら写真を撮っている。

そこへ藤堂、鴨池入ってくる。

藤堂 「澤田、あとの事は俺たちにまかせな。」

澤田 「藤堂、鴨池！」

藤堂 「俺たちは闘いのプロだからな。」

高柳 「何でお前らがいるんだ？」

藤堂 「俺たち”あけぼの隊”にも退去命令が出された。ほとんどの奴らは出て行くことを

決めた。だが俺は最後まで闘い抜く。もうこの際、敵も味方も関係ない。」

ミチコ「良いわ。私たちも多くの同志たちがここを離れて行きました。ここに残る者は

みんな同志です。これまでのことは忘れて一緒に闘いましょう。」

ミチコ、握手を求める。

藤堂、何か言おうとするが、なかなか口に出せない。

鴨池、藤堂の後ろにスツと立ち、

藤堂 「お、俺は……。」

鴨池 「お前のことが好きだー！」

ミチコ「……!!」

藤堂 「俺の心を勝手に読むな！」

ミチコ「(笑顔で)期待してます。」

藤堂 「まかせとけ。(鴨池に) そうと決まれば、闘いの準備に取り掛かるぞ！」

鴨池 「あれ出しちゃう?。」

藤堂、鴨池出ていく。

吉野、小刻みに震えている。

ヒトミ「何震えてんだ？」

高柳 「寒いのか？」

吉野 「武者震いだよ！それにここは少し冷えるから…。」

トモコ「それなら、みんなで歌でも歌いませんか？少しは暖まるかも。」

サナエ「良いんじゃない？」

澤田 「そうだな。高柳、景気づけに一曲弾いてくれよ。」

高柳 「何が良いかなあ。」

高柳、ギターを手にして「友よ(岡林信康・作詞作曲)」を歌い始める。

やがて全員の合唱

合唱の中、安田講堂に残るもの、去るもの、お互いに別れの挨拶を交わし出ていく。

ヒトミ「サナエさんは、ここを出ていかれるんですか？」

サナエ「ええ。私はここに残る理由はないもの。こことは別の舞台で闘うの。」

本当の意味での男女同権、男女平等の社会が実現するまでね。」

ヒトミ「まだどこかで会えたら取材させてもらえますか？」

サナエ「ええ。それまで、さようなら。」

暗転

【9】

1月18日 安田講堂内 朝

暗転中、ヘリの音が激しく鳴り響く。

拡声器の声「安田講堂内の学生諸君、これ以上、無用な抵抗を続けることは極めて危険です。」

速やかに抵抗をやめて出てきなさい。」

舞台が次第に明るくなっていく。

ヒトミ『そして翌朝。予告通り、機動隊からの総攻撃が始まった。』

舞台上には、吉野、藤堂、鴨池、ヒトミがいる。高柳は離れた放送室から、

講堂内に指示を伝えている。吉野、ヒトミ、高柳は鈍色のヘルメット、

藤堂・鴨池は赤いヘルメットと水中メガネを付けている。舞台の外側

にサナエとトモコが語り役として立っている。

吉野 「きたぞー！」

高柳 「総員、戦闘配置についてください！」

鴨池 「(外を覗いて)おー、こりゃ沢山来たねえ。」

藤堂 「コウタロウ、さっさと戦闘準備に入れ！」

各自、戦闘配置につく。ヒトミはカメラを、高柳以外は全員、ゲバ棒を構えている。

サナエ『外には灰色の塗装をした警備車両が約30台。そして放水車、防石車、レッカー車。

続いてジェラルミンの大盾を持った機動隊員たち。この攻防戦に動員された機動隊員の数、総勢8500名。』

拡声器の声「君たちは完全に包囲された。無駄な抵抗はやめなさい。」

トモコ『午前8時30分。戦闘開始を告げる催涙ガス弾の乾いた破裂音が響き渡りました。』

催涙弾の発射音

吉野 「なんだ、今の音！」

藤堂 「砲弾…な訳はないから、おそらく催涙弾だろう。さっさと口元覆わないと涙やら鼻水やら、胃の中のものやら、全て止まらなくなるぞ。」

ヘルメット姿のミチコ入ってくる。

ミチコ「それでは健闘を祈ります。またあとで会いましょう。」

ヒトミ『安田講堂攻防戦。この時ばかりは”安田城“と呼ばれていたが、安田城を守るための闘いが始まった。だが力の差は圧倒的だった。日大全共闘の協力によって作られた強固なバリケードも、機動隊の放水の威力には敵わなかった。』

へりと放水、時に催涙弾の音が激しく鳴り響く。

鴨池 「あそこのベニヤ、放水で膨らんでるよ！」

藤堂 「何としても防ぐんだ！」

藤堂、鴨池、ゲバ棒で窓のベニヤを抑える。

藤堂 「負けるなよ。」

鴨池 「うん。」

藤堂と鴨池、放水により吹き飛ばされる。

鴨池 「うわー！」

藤堂 「うおー！」

鴨池 「まずい。ベニヤが破れた箇所から、催涙弾が入り込んでくる！」

藤堂 「窓には近づくな！ここはもうだめだ。次に行くぞ。」

高柳 「今、工学部列品館で催涙弾の直撃を受けた学生が重体になったというニュースが入りました。皆さん、催涙弾には注意してください！」

ミチコ「あれは何？」

吉野 「なんだか、鳥かごの化け物みたいだな。」

ミチコ「人が大勢入ってる。」

吉野「動いてるぞ。」

トモコ『学生たちの目をくぎ付けにした「鳥かご」は、屋根は板張り、囲いは金網の巨大な檻のようなもので、その中に機動隊員が入り講堂の窓を破壊して突入するという作戦でした。ですが、学生たちも黙って見ているはずはありません。』

藤堂「コウタロウ、火炎瓶だ。誰かが投げた石で鳥かごの屋根が割れた。逃げ道は警備車しかないからな。先につぶしてやるうぜ。」

鳴池「うん。一気に形勢逆転だね。」

藤堂、鳴池火炎瓶を投げようとする。

吉野「撃ち方やめー!!」

藤堂・鳴池「……!!」

ヒトミ「どうしたんだ？吉野。」

吉野「機動隊員が炎に包まれている。無力な敵兵を打つべきではない。」

ミチコ「私たちは暴徒ではありませんから。人を殺めることを目的とはしていません。」

高柳「今、新たなニュースが入りました。神田カルチェラタンでは、1万人の学生、市民が我々の応援に集まっています。お茶の水交番も攻め落とした模様。繰り返します。神田カルチェラタンでは……。」

へりと放水と催涙弾の音が止んでいく。

サナエ『激しく続いた安田講堂攻防戦も、日が暮れるに従い徐々に小康状態となりました。疲れはあるものの、丸一日、安田講堂を守り抜いたという安堵感が学生たちに広がっていました。』

吉野「(おにぎりを食べながら) うめー。今日一日何にも食べてなかったからな。

ミチコちゃんも食べなよ。」

ミチコ「ええ。あとで頂きます。今はちよっと、疲れて体が動きません。」

藤堂「大丈夫か？強くても、やっぱり体力は女なんだな。」

ミチコ「痛みをこらえて) くっ、一階の様子はどうでした？」

藤堂「まだ何とかバリケードは持ちこたえている。だが、窓は全部破られて水浸しだ。」

鳴池「ほんと、滝の中にいるみたいだ。息が出来ないよ……。」

高柳が入ってくる。

高柳 「機動隊のやつら、夜中でも厳戒態勢を解かないつもりらしい。むしろ数が増える。流石に夜中は攻撃してこないだろうが、放水も続いているし、夜明けとともに一気に攻めてくるかもしれないな。」

藤堂 「建物内に入ってきたら返り討ちにしてやる。」

ヒトミが寒さで震えている。

ヒトミ 「はあ、はあ…。」

鴨池 「ヒトミちゃん、大丈夫？」

ミチコ 「夜は冷えるから、服が濡れたままだと、体温を奪われてしまう。

(ヒトミに) 「いったん全部服を脱いで乾かしましょう。」

鴨池 「全部…服を…脱ぐ…？」

鴨池、気絶する。

吉野 「なんなんだ、こいつは。」

暗転

1月19日 安田講堂内 早朝

再びへりと放水、催涙弾の音が激しく鳴り響く。

明転

ヒトミ 『1月19日午前6時30分。機動隊の攻撃が再開された。催涙弾や放水が切れ間なく続いている。』

高柳 「なんだあれは…？」

サナエ 『木々の間から現れたのは材木で組み立てられたトンネルだった。屋根にはジェラルミンの大盾が取り付けられ、着実に安田講堂入り口に向かって進んでくる。』

藤堂、スリングショットを打つ。

藤堂 「全く歯が立たん。」

鴨池 「なんせジェラルミンだからね。昨日の鳥かごとは違う。火炎瓶も石も、決定打にはならないよ。」

藤堂 「だが、攻撃の手を休めるわけにはいかない。攻撃は最大の防御だ。早く破壊しないと、機動隊の侵入を許してしまう。」

鴨池 「あ、トンネルが安田講堂と繋がった…。」

吉野 「よし、こうなったら直接やつらの目の前に行って攻撃を仕掛けるしかないか。」  
ミチコ 「ダメです、吉野さん。命を捨てに行くようなものですよ。」

吉野 「俺一人の命でみんなが助かるって思えば安いものよ。」

ミチコ 「全員、必ず生きて帰るって、澤田さんと約束したんです。」

吉野 「……。」

ミチコ 「それに、吉野さんが命を懸けたって、たぶん彼らには敵いません。彼らは戦闘のプロフェッショナルですから。対峙してしまえば勝ち目はありません。」

吉野 「ミチコちゃんは冷静だね。じゃあ、どうする……。」

ヒトミ 「あっ！トンネルが壊れた。」

ミチコ 「もう機動隊は中に入ってしまったようですが、せめてこれ以上侵入させないために、徹底的に破壊しておきましょう。私は前線の様子を見に行きます。」

吉野 「うん。ここは俺にまかせて。」

トモコ 『昼過ぎ、一部の学生が安田講堂の窓を覆っていたベニヤをはがし始めました。

おそらく敗北を悟り、充滿した催涙弾のガスに耐え兼ね、新鮮な空気を吸いたくなっただけでしょう。』

ミチコ 「状況はどうですか？」

藤堂 「もう機動隊は二階まで来ている。火炎瓶も石も使い果たしてしまった。」

ミチコ 「そうですか……。」

藤堂 「成す術なし……か。」

サナエ 『機動隊員はロッカーにロープをかけ、バリケードを1つ1つ排除していきました。突破されるのはもう時間の問題でした。』

ヒトミ 「あー！」

吉野 「どうした？」

ヒトミ 「機動隊員と、目が合った……。」

ミチコ 「……。」

高柳 「学生諸君。抗戦中止だ。大講堂に集結してください！」

暗転

暗闇からインターナショナルの合唱が聴こえてくる。

次第に舞台が明るくなっていく。

ヒトミ 『権力に抗い、若者が希望にあふれ、行動を起こしたこの時代。その一つの時代が、この安田講堂陥落によって、終わりを告げたのです。』

ミチコたち、肩を組んでインターナショナルを歌う。一人また一人と倒れていく。

最後に残ったミチコ、時計塔の見晴台に立ち、ヘルメットを外して髪をほぐく。

ミチコ「我々の闘いは勝利だった。全国の学生、市民、労働者の皆さん、我々の闘いは決して終わったのではなく、我々に代わって闘う同志の諸君らが再び解放講堂から  
時計台放送を行う日まで、この放送を中止します。」

暗転

放水と催涙ガス弾の音が一段と大きく鳴り響く。

### 【エピソード】

静寂の中、ゆっくり明転

舞台上に澤田が立っている。手にはミチコの落とした手紙。

手紙を開いて読み始める。

澤田 「拝啓 澤田勝利様 初めてお手紙を書きます…。」

いつの間にか高校生（制服姿）のミチコが立っている。

ミチコはとても晴れやかな表情をしている。

ミチコ「澤田さんと初めて出会ったのは高校2年生の時でした。映画を観た帰りにデモに巻き込まれ怪我をした私を助けてくれたこと、たぶん覚えていないでしょうね。  
私はあの時、あなたに恋をしました。」

ミチコの後ろ姿をじっと見つめる澤田

暗転

【完】

### 【参考文献】

安田講堂1968～1969 島泰三著（中央公論社）

東大全共闘1968～1969 渡辺 眸著（角川ソフィア文庫）

私の1960年代 山本義隆著（金曜日）

東大闘争50年目のメモランダム 和田英二著（ウェイツ）

歴史としての東大闘争 富田武著（ちくま新書）

日大全共闘1968叛乱のクロニクル 眞武善行著（白順社）